

20万件近い社会生活に関わる電子化資料、文書資料が含まれ、長江流域の社会生活に関する資料を中心とする所蔵資料システムを暫定的に構築した。この他に、31万通を超える民間の手書きの書簡や、3,200冊以上の日記・業務ノートも収集した。以下ではそれらの資料の状況を簡単に紹介する。

電子化資料：

- 1、十数の生産大隊の詳細で完全な会計・統計資料。さらに貴重なのは、5つの生産小隊の会計資料で、農民一人一人の毎日の活動の手配、数千の家庭の数十年間の経済的収入と分配について詳細に記録している。
- 2、電子化による分析の潜在的可能性を持つ数十種の貴重な資料。たとえば某市の1950年代の完全な労働組合員登記表、江西の某地区の1950年代後半の幹部登記の電子データなど。

文書資料：

- 1、末端政府の文書資料。約10万件。
- 2、企業・事業団体などの単位の文書資料。約9万件。
- 3、労働組合、共産主義青年団など民衆組織の文書資料。約1万件。
- 4、会議記録。

私たちは数十種の継続的な会議記録を収集した。企業・事業団体などの会議記録、生産大隊の会議記録、造反派の組織の会議記録、労働組合の会議記録などが含まれる。

個人や家庭の資料：

- 1、個人書簡。31万通以上。
- 2、個人の日記・業務ノート。3,200冊以上。

集団化時代の農村末端檔案と山西社会の研究

現代中国史研究の実践においては「下から上へ」と「上から下へ」の二つのルートを結合させなければならない。これは歴史研究の理論と方法、そして資料の発掘と利用の双方に対する挑戦であり、中国現代社会史研究は全力で「資料革命」を展開する必要がある。

一、「孤軍奮闘」から「集団調査」へ——檔案の収集

1、最初は資料の収集は「孤軍奮闘」が中心だった。多くは山西大学中国社会史研究センターの人員が自分の故郷から着手し、熟知した環境と有力な人脈という基礎の上に調査・収集・整理を行った。

2、個別調査の他に、大規模・組織的な集団での資料収集も展開した。村莊を単位としたものから、県・市の区域に拡大し、全面的な「絨毯式」収集を進めた。

3、農村檔案は複雑さと多様性を兼ね備えた、雑然とした「資料群」であり、収集した地点は南から北まで山西省の全域に及ぶ。内容的には村莊や郷鎮の他に、工場・水利・営林場などの関連資料を含む。

二、本来の豊かな姿の提示——檔案の整理と出版

1、1,000万件に上る檔案の中から20の村莊を選んだ。選択の基準は、時間的に完全に連続しており、内容的に系統だっていること。

2、資料整理は順序立てて行った。まず村落を単位として檔案の分類を行い、次に目録の編集作業を行い、電子ファイルを作成し、同時に檔案ごとに整理番号を付した。最後が収蔵で、すでに整理して作成した目録

行 龍（山西大学副学長）・馬 維強（山西大学副教授）



にしたがって、檔案袋を単位として、檔案棚に収め、番号を付けて保存する。

3、我々は20の村莊の計100冊ほどの完全な資料テキストを選んで編集・出版した。檔案資料の電子化・データ化の作業も継続して試みている。

三、草の根は何によって声を発するのか——テキスト中の末端社会

1、資料が依託された対象や反映された内容から見ると、村莊の檔案資料の内容は村莊と村民の生産生活と社会的交流活動が中心であり、灌漑区域・供給販売合作社などの「単位」〔機関〕に依託された檔案資料の内容には特定のテーマに関係するという特徴がある。

2、大多数の村莊は階級成分登記表、完全な帳簿資料や上級からの文書を保存していたが、それぞれに特徴もあった。ある村では個人檔案が豊富で、ある村では村莊の活動を含む内容が比較的多く、ある村ではファイル化された上級からの檔案が完全に揃っており、ある村では帳簿が系統だっており、ある村では各種の経済活動に関する分類・統計が比較的詳細だった。

3、大まかには8つに分類できる。支部や民衆団体組織の文書、行政文書（上級からの文書を含む）、科学技術檔案、個人檔案、財務檔案、歴史檔案、内部資料、その他の種類の檔案資料である。

四、集団化の回顧——山西農村社会の変遷

1、資料の収集・整理を実践する中で、次第に「フィールドや社会に向かう」という研究方法と学術思考が形成された。本質から言えばこれはある種の核心的な問題意識でもあり、豊かな含意を持つ。史料、研究内容、理論的方法の三位一体であり、相互に依拠しあい、相互に包括しあい、緊密に関連している。

2、中心となる関連研究は、公文書、公告や農村の末端文書、帳簿を総合的に利用し、政治史的発展というマクロな文脈を考慮しつつ、ミクロな農村の情景にも十分注意する。村莊、公社、県の領域あるいは独立した河川流域や水利システムを研究の単位とし、農業水利建設と農業技術、女性解放、医療衛生、日常生活といった面にも及ぶ。

第2セッションコメント

内山 雅生（東洋文庫研究員・宇都宮大学名誉教授）

祁 建民（長崎県立大学教授）

第2セッションのテーマは「大衆・集団・国家」で、主に民衆と国家の問題を論じた。さきほど二人の先生はそれぞれ民間の手紙と農村の末端檔案の収集・整理状況について述べ、特にそれが現代中国研究に果たす重要な役割について言及した。彼らは民間資料の収集に尽力するだけでなく、関連するフィールドワークも実施し、手紙の作者あるいは資料を生み出した村落に対する実地調査を行い、文字資料と相互に裏づけをとった。これらはいずれも国家や政府の檔案文献の中から発見・理解することは非常に難しいもののため、彼らの研究は非常に重要ですばらしい。地方・民間の文献と国家・行政当局の檔案の間には一種の緊張関係が存在し、重視に値する。特に民間を主な対象とする社会史研究において、これらの文献を解読する際には、すでに社会構造の中に巻きこまれている民間および政治問題と一定の距離を保たなければならない。

私たちは民間あるいは地方の文献の使用に際しては、注意する必要があると考える。まずはこれらの民間あるいは地方の文献の中からどのように個人・局部と国家・全体の相互関係を理解し、研究の「細分化」を避けるかということである。個人と社会、村落と国家を結びつけて考えなければならない。しかもそこから過去の研究の不十分な点を見つけなければならない。この面では、日本の学界にはすでに、村落の文献を利用したよい研究がある。

日本の近世史研究にも「地方文書」と呼ばれる文献がある。主に室町時代から江戸時代の封建体制期に形成された、農村に関連する古い文書の総称である。たとえば神奈川県には、1868年時点で945の町村があったが、関連する古い文書は1972年までに合計25万件保存されている。東京大学の牧原成征は『近世の土地